〔書評〕東アジアから見るアラブ・メディア

―千葉悠志 著『現代アラブ・メディア―越境するラジオから衛星テレビへ』―

トパチョール・ハサン

はじめに

二〇一〇年にチュニジアで発生し、短期間にアラブ世界に拡大した、いわゆる「アラブの春」の後、世界はこの地域に目を向けた。様々な国の政治体制が変わり、シリアの内戦が続き、イスラム国（ＩＳＩＳ）のような過激派組織が現れるなど、問題が拡大しつつある。つまり、「アラブの春」と言われたものがいわば「アラブの冬」に変わりつつあるように見える。ところで「アラブの春」において、ツイッター、フェイスブックといったソーシャル・メディアが大きな役割を果たしたため、メディア研究の分野で「アラブ」、「メディア」、「ソーシャル・メディア」などのキーワードを連環させた研究が近年盛んになっており、世界各地の研究者がこの地域とメディアの関係について熱心に語っている。

本稿では、千葉悠志『現代アラブ・メディア―越境するラジオから衛星テレビへ』（ナカニシヤ出版、二〇一四年）の書評を行なう。本書は上に述べた研究動向に位置づくもののなかでも代表的なものだと言える。

本書は三部八章構成となっている。各タイトルは以下のとおりである。

序章　　アラブ・メディア研究の新地平へ

第一部　アラブ・メディアを論じる視角
第一章　国際コミュニケーション研究から地域研究としてのメディア研究へ
第二章　現代アラブ世界の概要
第二部　アラブ・メディア圏の形成と展開
第三章　エジプト・メディアの時代―対外メディア政策の展開と変容―
第四章　新たな国際情報秩序とアラブ・メディア―情報的自立の試行とその行方
第五章　国家統制の壁を超える情報の流れ―ラジオ・新聞・カセットテープ―
第三部　衛星放送時代の到来とアラブ・メディア圏の新展開
第六章　アラブ世界の衛星放送
第七章　アラブ世界の衛星放送局の多様性―具体的な放送局の分析から―
第八章　アラブ諸国のメディアシティ―放送の「多様性」を促す仕組みについての考察
終章　21世紀のアラブ・メディア研究へ

序章「アラブ・メディア研究の新地平へ」では、本書の主題と目的が明らかにされている。本書の主題とは、二〇世紀半ば以降のアラブ・メディアを、特にそのトランスナショナルな側面に着目して論じることである。そして、メディアの置かれたアラブ政治、経済、社会的文脈を踏まえ、国境を越えたメディア同士の総合関連と、トランスナショナルなメディア空間である「アラブ・メディア圏」の形成およびその構造を論じることが全体的な目的とされている。すなわち、本書においてはアラブ・メディアの発展のダイナミズムをその内側から解明することが目指されている。

次に、序章ではアラブ・メディア研究の歴史について説明が行なわれている。アラブ・メディアに関する研究は二〇世紀初め頃から現れ、基本的にはアラブ世界と欧米という二つの世界で発達したが、それが盛んになったのは近年のことだという。それに続いて、先

行研究が紹介されており、フィリーゴ・タッラーズイ『アラブ・ジャーナリズムの歴史』（一九一三年から一九三三年にかけての２０年間を対象に・四巻）が重視されている[1]。アラブ・メディア研究の第一人者としてはムハマド・アーイシュが紹介されている[2]。欧米におけるアラブ・メディア研究としては一九五三年に出版されたトム・マクファッデン『アラブ世界の日刊ジャーナリズム』[3]が最初の著作として紹介され、その後研究が増えていることが分かる。

ここではアラブ・メディアに関する研究が、「欧米の研究者による研究」と「アラブ人の研究者による研究」として分析され、アラブ・メディアの歴史的背景が明らかにされている。重要なポイントは、アラブ世界におけるメディア研究は欧米からの輸入学問として始まり、アラブ世界では欧米のあり方を模倣する形で研究が進められてきたということである。そのことを踏まえた上で、本書の意義は以下の四点に集約される。

（一）中東地域研究とメディア研究の双方の研究を踏まえることで、アラブ・メディアを適切に論じていること。

（二）一九九〇年代以降の衛星放送の登場に伴う、トランスナショナルなメディア空間の変容を適切に踏まえていること。

（三）アラブ・メディアの置かれた歴史、経済、社会的文脈を踏まえ、アラブ・メディアに関する深い理解を可能にしていること。

（四）従来の研究の中であまり見当たらないようなテーマである、一九九〇年代以降のメディアシティ建設の動きなどについて実証的に述べていること。

第一部　アラブ・メディアを論じる視角

第一章　国際コミュニケーション研究から地域研究としてのメディア研究へ

本章では、本書が「地域研究としてのメディア研究」アプローチを採用することが述べられている。これは

「国家社会を基本的単位とし、マス・メディアを柱とした」国際コミュニケーション研究（鶴木眞）とは異なる。一九九〇年代以降急速に変化してきたメディア状況によって国際コミュニケーション研究の定義が曖昧になってきている状況を鑑み、トランス・ナショナルな「地域研究としてのメディア研究」アプローチを採るのである。

なお学問としての国際コミュニケーション研究が社会に認められるのは一九四〇年代後半から一九五〇年代初頭からだとされている。初期の国際コミュニケーション研究の問題点は、当時の冷戦構造の影響下にあって、現実をありのままに説明するよりはあるべき現実を作り出そうとしたことだと指摘されている。

つづいて、一九八〇年代以降の国際コミュニケーション研究に関する先行研究が概観されている。ここで、千葉はグローバル化とメディアに関して、デヴィッド・ヘルドの研究を参照し、ヘルドが考えるグローバル化の三つの部分（グローバル論者・伝統論者・変容論者）について詳細に説明している。それに対して、ジョン・シンクレアの議論が紹介されている。彼は文化帝国主義を批判し、グローバル化が進むなかで従来とは異なる重要な変化が生じていることに主張し、その理解にあたってはアラビア語、スペイン語などといった言語に基づく世界の多極的な情報秩序を踏まえることが必要だとしている。また、その情報秩序とグローバル化の関係についてカイ・ハーフェズの議論が説明されている。そして、アラブ世界の「地域的なメディア圏」を論じる上で、「地域研究としてのメディア研究」アプローチを「地理研究」的アプローチと「メディア研究」的アプローチとして二つに分けて、説明している。

第二章　現代アラブ世界の概要

本章はアラブ世界について概観している。本書でいうアラブ世界は基本的に中東地域に属し、アラビア語

を公用語とし、アラブ連盟に参加する二二ヶ国から構成されるものだと定義されている。そして、アラブ世界の成立から今日に至るまでの歴史的変容を概観しつつ、メディアと深く結び付く各国の国土面積や人口、政治・経済状況などについて説明している。また、アラブ世界以外にも暮らしているアラブ移民達の数が増加しているため、アラブ・ディアスポラとアラブ・メディアとの関係についても考察されている。

本書で言うアラブ・ディアスポラとは、アラブ世界の外側に暮らすアラブ人のことである。メディアを通じて日々アラビア語の情報にアクセスを試み、アラブ人としてのアイデンティティを保ち続けるグループの人たちのことを意味する。歴史的に考えるとアラブ世界の外側に出ていく人々は一九世紀以降に増え始め、二〇世紀に入るとその数を拡大する。著者は、特に一九九〇年以降の状況を説明するために衛星放送局アル・ジャズィーラの視聴者数から例を述べている。それによると、視聴者数は世界全体で約五三〇〇万人に達すると見積もられているが、そのうち非アラブ圏の視聴者数はその一一・七％にあたる約六二〇万人という。そのような事実は、アラブ人移民たちがメディアを通じてアラブ人としてのアイデンティティを日々確認し続けていることを示している。そして、本章はアラブ世界においてメディアの発達を考える上で必要な情報として国土面積や人口、経済状況などを紹介するものであった。それを踏まえた上で、以下の章では、二〇世紀半ば以降のアラブ・メディアに焦点を当て、分析を行なっている。

第二部　アラブ・メディア圏の形成と展開

第三章　エジプト・メディアの時代―対外メディア政策の展開と変容―

第二部は、一九五〇年（一九五二年のエジプト共和革命以降の時代）から一九八〇年代末までのアラブ諸国におけるトランスナショナルなメディア空間（以下

アラブ・メディア圏〉の形成と展開について論じている。

そのために、著者はレバノンと並んで、アラブ世界の文化的中心であったエジプトを取り上げている。二〇世紀後半は、エジプトのメディアがアラブのメディアを代表するような、まさに「エジプト・メディアの時代」だったからである。

識字率が総じて低いアラブ世界では、映画、ラジオ、テレビがまさに「大衆のメディア」として極めて重要であった。その時代にエジプトが果たした役割は大きかったと著者は述べている。「エジプト・メディアの時代」の起点は一九五二年の共和国革命である。汎アラブ主義を掲げた大統領ナセル（在位一九五六―七〇年）がメディアを積極的に利用したことで、そのメディア空間が国境を超えたのである。

一九五〇年以降のエジプト・メディアについて、それが権力に取り込まれトップ・ダウン式の統制が行われるようになる経緯が、特に制度的な側面から論じられている。

プリント・メディアについて言えば、まずは「解放の家」出版社が設立され、革命から二ヶ月程度で『解放』が発行されるようになる。本雑誌には革命指導評議会のメンバーが寄稿し、内容としては、反帝帝国主義的・左派的傾向が反映されていた。一九五三年には、それまであった政党機関誌の発行が禁じられ、「解放の家」出版社から『ジュムフーリーヤ』が発行される。その一方で、一九五四年には、当時アラブ世界最大の最大発行部数を誇っていた『エジプト』が、改革政権への批判を強めたとの理由から、新聞発行に必要なライセンスがキャンセルされる。このような政府のプレッシャーは一九五六年、一九五八年にますます強くなり、革命政権は反政府的な新聞やジャーナリストに対して抑圧的なメディア政策をとることで、メディアによる政府への公然たる批判の圧殺に成功したという。

ラジオ放送について言えば、エジプトではラジオ放送が一九二五年に始まるが、最初はアマチュアの私設

によって行われたものであった。一九三四年以降、私設のラジオ放送が制限され、イギリス企業と半官半民の放送が行われ、後に、一九四七年から完全な国有のラジオ放送が行われるようになるが、当時は聴取料が高かったため、大衆レベルでの普及は革命後のことであった。一九五二年から一九七〇年までの間は、エジプトにおけるラジオの黄金期とされ、この時期にラジオを最も効果的に利用するために技術的・制度的な基盤が整えられていった。

これらのメディアが国家によって取り込まれ、動員的メディア・システムが確立するのは、一九六〇年から一九七〇年にかけてのことであり、その後は国家が主要なメディアを直接的に管理するようになる。

たとえばプリント・メディアにおいては、従来民間企業であった大手出版社が国営化され、そこで働くジャーナリストの身分も国家公務員へと変更された。ただし、政府がより力点をおいていたのは放送メディア統制であり、この時期からラジオ放送の受信機数やラジオ聴取者、または放送時間は増えてくる。

このように、エジプトの主要なメディアは国家によって管理統制され、二〇世紀後半のエジプト・メディアは、国家イデオロギー装置として再編されたのである。

ナセル時代における「外向きのメディア政策」の節は、実際にどのような対外メディア政策が行われたかを情報の「送り手」と「受け手」の視点から説明している。「送り手」であるナセル時代のエジプトのメディア政策の特徴としては、「ポピュリスト的性質をもった権威主義体制」という形容が適当だとされている。ナセルはアラブ主義（ナセル主義）の理念を内外に広めるため、当時のアラブ世界で普及しつつあったラジオ放送によって、積極的に自身のイデオロギーを喧伝したという。こうしてエジプトのメディアは政治に利用され、例えば映画製作の場合も他のアラブ諸国へと積極的に輸出されていったことが述べられている。

「受け手」に関しては、エジプトのメディア・コン

テンツが他国と比べて内容的に優れていたため、同時代のアラブ諸国の人々もそれを受容したとされている。また、エジプトが他のアラブ諸国よりもラジオや映画の発達が早かったことも指摘されている。

ラジオ放送は、娯楽的な番組と共に、共和革命という政治的イデオロギーを喧伝し、他アラブ諸国に影響を与えたと述べられている。

「対外メディア政策の展開」は対外ラジオ放送と映画やテレビ番組の輸出などの実態について述べている。まずはラジオ放送の推進をアラビア語放送と外国語放送の二つに分け、説明している。ここで、ラジオ放送がエジプトの国境を超えて広い範囲まで届くようになり、エジプト以外の国々に住むアラブ人によっても一般的に聞かれるようになったものとして「アラブの声」と「ラジオ・カイロ」が紹介され、それぞれのラジオ番組において各国別聴取率が挙げられている。これによれば、一九七〇年代半ばで二〇%近くの成人が、週に一回以上はエジプトのラジオ放送を聴取していることが分かる。

革命後のエジプトの外国語放送について言えば、政府はインドネシア、インド、パキスタン、東南アジアを対象に、四つの外国語放送―それぞれインドネシア語、英語、ウルドゥー語、アラビア語による放送を開始している。そして、後にトルコを対象としたトルコ語の放送など、放送の数が増えていくが、著者は対象選定の理由を説明していない。

映画とテレビ番組の流通については、まずナセル時代に海外からの輸入映画数が限られ、エジプトの国内映画産業が活性化したことが重要なポイントとされている。製作された映画の内容について「映画やテレビなどの製作者が当時のアラブ社会主義の理念に賛同し、自らの映画にそうしたイデオロギーを積極的に取り入れていった」[4]とされているが、作品の具体例は紹介されず、当時の映画やドラマが輸出された国々（シリアやヨルダン等）について述べられている。

次に、「ポスト・ナセル時代におけるメディア政策の

変容」について説明する。本節は、ナセルの死後のエジプトにおける対外メディア政策の転換について「送り手の変化」、「受け手の変化」、「対外プロパガンダ放送の減少と国内放送の充実」、「利益重視の輸出政策への切り替え」という四つの視点から明らかにしている。

「送り手の変化」としては、ナセルの後継となったサーダート大統領のもとで、エジプトの政策がアラブの連帯から「一国主義」へと向かったことが重要なポイントである。具体的には、一九六七年の第三次中東戦争とそこから生じたエジプトのラジオ放送への信頼失墜とエジプト国内の政治状況の変化、特に大統領の交代にともなう政策変化が挙げられている。結果として、サーダート時代には、アラブの連帯よりも、エジプトの国益を優先させる政策がとられるようになり、これはメディア政策にも反映されたのである。

「受け手の変化」としては、一九七〇年代以降にエジプトとサウジアラビアの関係が強まり、エジプトのメディア・コンテンツが大々的にサウジアラビアへと輸出されるようになる。その結果、サウジアラビアから入ってきた資金がエジプトのテレビを白黒からカラーテレビへと変更するために利用され、国内のテレビ受像機の普及をも後押ししたという。しかし、エジプトがイスラエルとの平和を条件にアメリカから資金援助を受けると、アラブ世界で反エジプトとなったアラブ各国の連帯が成立し、アラブ連盟でエジプトの資格が停止された。後に、他のアラブ諸国はエジプトの出版物、映画、テレビ番組などのメディア・コンテンツを公式的に輸入することが出来なくなったのである。その結果、アラブ世界における映画やドラマ番組の流通を、エジプト政府が直接コントロールすることは難しくなった。

「対外プロパガンダ放送の減少と国内放送の充実」は、一九七〇年頃を境として生じたエジプトのメディア政策の変化を「ラジオ政策の変化」と「テレビ政策の変化」として二つに分けて、説明している。ラジオの場合、外国語放送が減少し、それに対してアラビア

語放送が増加していく。著者はこの変化を、「政府によるラジオ放送政策の対象は、それまでの「外向き」のプロパガンダ放送ではなく、国内放送にあった」というふうに解釈している。

一方、テレビ政策の変化として、一九七〇年代からエジプト国内の経済成長とともにテレビ一般家庭においても普及したこともあり、政府はテレビ・チャンネルの数を徐々に増やしていったのである。その結果、エジプトのテレビ放送は八つまで増え、一九六一年には一日の総放送時間が二つの放送で六時間にすぎなかったものが、二〇〇〇年には八つの放送で約一五〇時間まで延長されたのである。

「利益重視の輸出政策への切り替え」では、ナセル時代に盛んだった「外向きプロパガンダ放送」はサーダート大統領以降にどう変わったかについて語る。タイトルからも明らかだが、サーダート以降、イデオロギーよりも経済重視のメディア政策が進められ、アラブ世界ではなく国内第一主義が掲げられたという。そして、イデオロギー喧伝ではなく、外貨獲得の目的をもって他のアラブ諸国へとテレビ・ドラマが輸出された。

纏めると、本章は一九五〇年から一九八〇年代にかけてエジプトのメディア政策の動きを明らかにし、それがいかにアラブ世界に影響を与えたかを明らかにしたものである。一九五〇年代から一九六〇年代にかけてエジプトでは、ナセル大統領がアラブ社会主義の主張をメディアを利用しながら国内外に発言した。当時の「情報帝国」エジプトから発信される国際放送やメディア・コンテンツはアラブ諸国に影響を与えた。しかし、サーダート以降は対外メディア政策から、より内向きのメディア政策が重視され、以前のイデオロギー性が強いアラブ・メディア圏は、サーダート以降より市場経済的なアラブ・メディア圏へと変化していったのである。

第四章　新たな国際情報秩序とアラブ・メディア
―情報的自立の試行とその行方―

本章では、アラブ諸国全体の動きを巨視的に検討する。そこで、一九七〇年代から一九八〇年代にかけての国際舞台で大きな争点となった「新たな国際情報秩序」(*New Information and Communication Order, NICO*)をめぐる議論を概観し、その対応をめぐるアラブ諸国の対応を通じて、アラブ・メディアの国境を超えた相互連環やアラブ・メディア圏の形成をめぐる国家の動きを中心に分析している。

「ポスト植民地期における情報秩序」では、国際コミュニケーション問題をめぐる一九七〇年代から一九八〇年代にかけての「国際」舞台の動きが概観されている。ここではまず、先進国と途上国の間の情報格差を問題視する視点から、「情報の自由な流れ」(*free flow of information*)がキーワードとして現れる。

そして、「ムスタファー・マスムーディーの議論を中心に」は、「新たな国際情報秩序の父」とされているムスタファー・マスムーディーの議論に着目している。その議論の核心は、「国家間の社会的・技術的な不平等な分配によって、「北」から「南」へと一方的な情報の流れが生じていること、それが「持てるもの」と「持たざるもの」の構造を再生産させていると捉え、その是正に向けた対策が必要である」ということである。

様々な動きの結果、「一九七〇年代から一九八〇年代にかけての途上国を中心に進められた新たな国際情報秩序構築をめぐる試みは、最終的に米英の撤退にともなう援助の打ち切りをもって幕を閉じた」[5]と著者が指摘している。

そして、「地域的協同の試み」があり、これはアラブ地域の動きを「地域的な情報共有の試みとその歴史的・思想的背景」と「アラブ諸国におけるトランスナショナルな情報組織」、または、「通信社設置をめぐる地域的協同」などの視点から説明している。ここは各施設、あるいは各 *union* について明細に述べているが、

ここでは省略する。

つづいて、「国家と情報的独立」は、当時の情報共有を目指した国家同士の連帯が失敗し、あるいは遅延するようになった理由について、アラブ各国においてテレビと通信社の発達を検討しつつ、説明する。テレビ放送の発展について言えば、テレビ放送の導入と国有化は一九五〇年代から一九六〇年代を通じて行われ、一九七〇年代半ばまでにはほぼすべてのアラブ諸国が国有テレビ放送を行うようになった。その要因としては、アラブ地域の地理的・政治的な特徴が見られ、著者はそれを三つに分けている。その一つ目は比較的独立が早かったイラク、レバノン、シリア、ヨルダンなどの国々と、それに隣接するエジプトである。これらの国々では、テレビ放送は国家主導で開始され、他国と比べて比較的早かったという。二つ目は、チュニシアを除くマグリブ地域の国々である。三つ目は、最もテレビ放送の導入が遅かったのが、アラビア半島に位置する国々であった。さらに、各国におけるテレビ普及速度は国の経済的豊かさと深く関わっており、産油国であるクウェート、バハレーン、サウジアラビア、カタール等でテレビの一般家庭への普及が早かったとされている。

通信社の発展について言えば、一九五〇年代からアラブ諸国では国営通信社が次々と設置された。そして一九六〇年代から七〇年代の終わりまでに、すべてのアラブ諸国の通信社が出揃ったのである。さらに、各通信社の記者数、海外支局などを考えた場合、一九七八年までにアラブ諸国の多くが海外支局を設置し、特派員を有していたと指摘されている。つまり、一九七〇年以降のアラブ諸国はテレビ放送を発展させ、通信社を介した情報発信を積極的に行おうとしたのである。

第五章　国家統制の壁を超える情報の流れ―ラジオ・新聞・カセットテープ―

本章はアラビア語の国際ラジオ放送や新聞、そして

カセットテープを取り上げ、衛星放送やインターネットの登場以前に、つまり一九八〇年代の終わりごろまでに、アラブ世界でどのようなトランスナショナルな情報流通が行われたかを論じる。

「国境を超えるラジオ放送」では、ラジオ放送が登場する二〇世紀前半から、一九八〇年代終わり頃までの、アラブ世界におけるラジオ放送の歴史について説明されている。まず、世界のラジオ放送についての歴史的な背景を概観し、「アラブ域外からのアラビア語ラジオ放送」について述べられている。

アラブ諸国でラジオが現れるのは両大戦期のことである。まずは、一九三四年にイタリア（バーリ放送）、一九三六年にイギリス（パレスチナ放送）、一九三九年にドイツ（自由アラブの声）、あるいはフランスやソ連などもラジオ放送を開始した。アラブ諸国には特に冷戦時代、西ヨーロッパからのラジオ放送が多く、フランスは一九七〇年代以降、世界で最も長時間アラビア語ラジオ放送を行う国だったのである。

一方、「アラブ域内における越境するラジオの電波」は、放送を遠距離まで発信する国（エジプトとサウジアラビア）と近所の国々に発信する国（リビア、シリア、イラク等）の二つに分けて説明している。これらのラジオ放送は二〇世紀の早い時期から政治的に利用され、冷戦期に国際ラジオ放送として発達し、さらに二〇世紀半ば以降には各国のプロパガンダ放送としてりようされるようになっている。

次に「国際新聞」について述べる。これは主にアラビア語で印刷された国際新聞のことである。識字率の低いアラブ諸国では、ラジオやテレビと比べ、新聞の大衆的な影響力が限られていたが、知識人の討論の場として役割があり、さらに、アラブ世界の外で印刷されたアラビア語の国際新聞は、一九九〇年代以降の衛星放送の発達に大きな影響を与えたのである。そこでまず、アラブ域内の汎アラブ紙が紹介され、一九五〇年代から一九六〇年代にかけてレバノンの『ハヤート』や『アンワール』とエジプトの『エジプト』が挙げら

れる。そして、汎アラブ紙はレバノンとエジプトで表れたかについて、エジプトやレバノンにジャーナリズムの伝統が深く、十分のジャーナリストが存在したことと、エジプトとレバノンの新聞の文化的・政治的な影響力が強かったことが指摘されている。

それに対して、アラブ域外の汎アラブ紙について言えば、これは、権威主義的な政府が多くを占めるアラブ諸国では、自由な出版を行うことの困難さが原因でアラブ諸国以外の国々で出版される新聞のことであり、「オフショア・メディア」と言われている。「オフショア・メディア」は一九七〇年代以降に盛んになった。その理由としては一九七五年のレバノン内戦とサウジアラビアがはじめとした湾岸産油国からの投資の増加が指摘される。結果として、一九七〇年代以降、多くのアラブ系の出版会社がヨーロッパに誕生したのである。「オフショア・メディア」はアラブ域外に住む知識人たちの意見交換の場として機能したという。以上のようなアラビア語の新聞に加えて、『タイムズ』や『ル・モンド』などの欧米の国際新聞も存在した。ＵＡＥでは『ハリージ・タイムズ』、カタールでは『ガルフ・タイムズ』、サウジアラビアでは『サウディ・ガゼット』等が出版されたのである。

続いて、「カセットテープ」について、オーディオ・カセット・テープとビデオがそれぞれ分析されている。最初は導入の歴史について紹介され、後に一九七九年のイラン革命においてオーディオ・カセット・テープ役割について述べられている。そして、アラブ世界の場合、カセットテープはイランのような影響を与えなかったが、宗教的指導者らの説教がカセットテープへと吹き込まれ、それが国境を越えて広くアラブ世界で出回ったというような役割があった。

次はビデオについての節である。紹介されるのは、一九五〇年代半ばにＶＣＲと呼ばれるようになったものである。一九七〇年代初頭には、価格が高く、普及率が低かったＶＣＲは、日本の企業が格安で発売を開始してからの一九八〇年代に、アメリカの家庭におい

て普及率四〇％に至る。だが、先進国よりもVCRの普及や社会的影響力が問題とされたのは途上国や共産圏の国々であったという。そして、著者が指摘している重要なポイントは、ＶＣＲの普及によって、人々の間で様々なメッセージが回覧されるようになり、政府の管轄下にある既存のマス・メディアとは違った情報流通のパターンが生じたことである。

本章で論じられた国際ラジオ放送、新聞、カセットテープは、イデオロギーや域内政治、また各国の政治状況の如何にかかわらず、国家の情報統制の壁を越えて、政治主導のものとは異なるアラブ・メディア圏を形成する役割を担ったのである。

第三部　衛星放送時代の到来とアラブ・メディア圏の新展開

第六章　アラブ世界の衛星放送

世界人口に占めるアラブ人の数がわずか五％であるのに対して、アラブ世界におけるテレビ・チャンネル数は世界の衛星テレビ・チャンネル数の三八％であるという驚くべき事実を元に、本章は、一九九〇年代以降の衛星放送の展開を明らかにしている。まずは、「衛星放送の登場と展開」において、衛星放送の発展、普及した理由について、アラブの政治的・社会的な文脈も踏まえ説明されている。衛星放送の歴史的な情報を述べつつ、アラブ世界において衛星放送の普及について論じられている。それは一九九〇年代からのことだが、その普及の背景にあるものとして、多くの人々は刺激的な娯楽番組や自由な報道番組を視聴を望んだことが挙げられている。

一九九〇年代に衛星放送が普及してきたもう一つの背景は湾岸戦争であり、同年一二月にエジプトの「エジプト衛星チャンネル」(*Egyptian Satellite Channel*)がアラビア語で衛生法を行う初めてのテレビ・チャンネルとなった。それに続き、一九九二年にＵＡＥが「エミレーツ・ドバイＴＶ」を開始し、一九九四年にモロ

ッコが「ラジオ・テレビジョン・モロッコ」を開始するなど、衛星放送がますます増えてくる。

「民間衛星放送局の登場とインパクト」では、一九九一にアラブ初の民間衛星放送局となる中東放送センターがロンドンで立ち上げられ、これが様々な出来事をクオリティ的に放送することで人気を得、その後に無数の民間衛星放送局のモデルとなった過程が説明される。その後、一九九四年にサウジアラビアの「オービット」、一九九五年には、ロンドンからクルド系の放送局である「メドTV」、二〇〇〇年には、ロンドンからチュニジア系の「ムスタキッラ」等、民間衛星放送の数が増えていく。そして、「衛星放送の発達」にも繋がるが、二〇〇〇年代からは衛星放送市場に参入が容易となり、アラブ世界で視聴できる衛星放送チャンネル数が増加する。その背景としては、(一)市場への参入コストが低下したことで、中小の衛星放送もビジネスに参入できるようになったこと。(二)同じようなチャンネルの数が増えるという意味での、スピンオフ・チャンネルの増加。(三)それまで市民放送の活動を禁じていた国々が、国内における民間放送局の活動を許可するようになったことが挙げられる。

次節は「アラブ放送市場の分析」についてであり、まずは地上波放送と衛星放送についてである。アラブ世界においてこの二つが利用されるが、それぞれの特徴は、地上波放送の大部分が国営放送であり、衛星放送の大部分は民間放送であることだと主張されている。

ところが、「放送内容の分析」として、どのような番組が放送されているかというと、娯楽チャンネルや映画やドラマ番組に特化した番組を主に放送する映画／ドラマ・チャンネル、あるいはスポーツチャンネル等が多いという。つづいて国別にそれぞれ人気チャンネルなどの分析があるが、本稿では省略する。

第七章　アラブ世界の衛星放送局の多様性―具体的な放送局の分析から―

本章は、前章で述べた衛星放送の中、「アル・ジャズィーラ」、「MBC」、「アラブ・モターズTV」、「セブン・スターズTV」と「宗教系放送局」に焦点を当て、それぞれ明細に紹介されている。本稿ではそれぞれの特徴について簡単に述べる。

まず、「アル・ジャズィーラ」や「C」といった放送局は、様々なジャンルの放送チャンネルを傘下においていることである。そして、これらのチャンネルがアラブ的な視点に立った報道を行おうとするものであり、欧米のフォーマットをアラブ化しているのである。一方、「アラブ・モーターズTV」や「セブン・スターズTV」の場合、大手の放送局とは一線を画した放送を行おうとしている中小放送局の差異化戦略を見て取ることができるというところがポイントである。そして、宗教系放送局の場合、「それは独自の発展を遂げていると言えるだろう」(6)と著者は指摘している。

第八章　アラブ諸国のメディアシティー放送の「多様性」を促す仕組みについての考察

本章は、主に民間のメディア企業の誘致を目的としてアラブ各国で建設が進められ、経済特区の一つとなっているメディアシティについて説明している。これは経済特区とその運営体というひとまとまりの存在として捉えることができるという。そして、メディアシティに連なる先駆的な企業として、ヨルダンの「ヨルダン製作会社」、オマーンの「ハーレイ・メディア製作会社」などが例として挙げられている。つづいて、「メディアシティとは何か」において、メディアシティが登場した文脈などが紹介され、アラブ世界に現れたメディアシティは、情報化やグローバル化時代の恩恵に浴すべくそれぞれの国家が進めた経済的なプロジェクトの一環だと説明されている。具体的には「各メディアシティの概要」で、エジプト、ヨルダン、UAEの三か国に設置されたメディアシティの実態について述べられている。

エジプトのメディアシティは、一九九七年に開始された「エジプト・メディア・プロダクションシティ」(*Egypt Media Production City, EMPC*)であり、現在アラブ世界で最も大きなメディアシティとされている。しかし、二〇一一年の「革命」の影響を、エジプトのメディアシティは受けた。次は二〇〇一年に開始されたヨルダンのメディアシティについてであり、「ヨルダン・メディアシティ」(*Jordan Media City, JMC*)と呼ばれている。そしてこれは、民間企業の所有されていることでエジプトのメディアシティに対して利点を持ち、コストの低さにおいてドバイのメディアシティに対して利点を持っているとされている。次、UAEのメディアシティについて言えば、様々であり、七つの首長国のうち四つの首長国がメディアシティを設けているのである。

次に「メディアシティはどこまで自由か」という問題がある。エジプトの場合は二〇一一年の「革命」以降、メディアシティにおける「言論の自由」のありかたは、政治状況によって規定されており、放送局に対する政府の介入が行われていることが主張されている。それに対してヨルダンでは、放送局への直接的な圧力が行使されたケースが少ないという。これらに比べてドバイの場合、メディアの自由は完全には保障されていないが、にもかかわらず、最も放送の自由度が高いとされている。

纏めると、メディアシティは、一九九〇年以降のアラブ諸国における衛星放送の普及と軌を一にして現れたメディア企業向けの経済特区である。そして、新興企業にとって「メディアシティは放送市場への様々な参入のハードルを下げることに寄与しており、それなしにはアラブの放送市場へと参入しえなかったであろう、多数の多様な放送局の登場を促している」(7)と著者は言及している。その意味で、メディアシティはアラブ世界の放送の「多様性」を創出する役割をはたしたのである。

終章　二一世紀のアラブ・メディア研究へ／結論

本書の第一部では、まず「アラブ世界」について紹介が行われた。そして、「地域研究」と「メディア研究」を合わせ、「地域研究としてのメディア研究」という新しいアプローチが紹介された。また、アラブ世界の形成やその状況が検討された。

第二部では、一九五〇年代から一九八〇年代にかけての時期にアラブ世界で形成されたトランスナショナルなメディア空間について議論され、そこで、文化の中心地の一つであるエジプトに焦点が与えられ、分析された。

第三部は、一九九〇年以降にスポットを当て、特に従来のメディア状況を大きく変えた衛星放送に焦点が与えられた。そして、いくつかの放送局や紹介され、それぞれの特徴についても指摘された。そして、現代のアラブ・メディアは、アラブ世界の政治、経済、社会状況など、この地域に固有なイデオロギーとのかかわりのなかから形成されてきたものだと最終的に総括されている。

現在、アラブ世界におけるメディア研究が盛んであるが、それをアラビア語の文献を読み、詳細に分析する研究者が少ないこともまた事実である。そうした研究動向のなかで、アラビア語に精通した著者が豊富な一次資料を駆使して書いた本書は特筆すべき存在だと言えるだろう。そして、アラブ世界という各国のメディア状況を長いスパンで分析していることも重要だと思われる。

本書に関する疑問点を述べるとすれば、まず雑誌を分析対象とした議論が少ないということである。雑誌はラジオ、テレビ、新聞と並んで巨大な「受け手」を抱えるメディアであり、各国の異なる特徴を明らかにするために研究対象として考える必要があろう。

次に、アラブ世界を一枚岩的に捉え、分析することの困難さについて述べたい。本書においてアラブ世界とはアラビア語を話す人々の集合体として捉えられて

いる。しかし、「アラビア語」と一口に言ってもそれらは地域によって差異があるものである。またアラブ世界を構成する各国の歴史的・文化的背景には異なる点が多数存在する。アラブ世界のメディアについて考える際には、さまざまな国や地域の間に存在する差異のほうにも目を向ける必要があるだろう。

最後に、アラブ世界には含まれていないが、その研究に資するであろう国の存在についても言及しておきたい。歴史的にも文化的にもアラブ世界と密接に関係する国としてトルコとイランが挙げられる。例えばトルコではアラブ世界に関する研究が盛んであり、特に「アラブの春」以降その数は増えてきている。オスマン帝国以来、アラブ世界との関わりをもってきた周辺領域・トルコにおける研究も視野に入れることで、アラブ世界に関する探求もより深まるのではないだろうか。

また、「アラブの春」が始まったのは二〇一〇年であり、本書の出版は二〇一四年である。著者はここ近年のいわゆる「アラブの春」などの研究を今後の課題として考えているようだが、本書ではその問題については詳しく論じられてはいない。今後、著者による「アラブの春」論も待たれるところである[8]。

---

(1) (著者のオリジナルなタイトルは次の通りである) Filib Tarrâzî, Tarikh al-Shihafa al-Arabiyya, Bayrut, matabi dar sadir, 1967 (1913,1913); Filib Tarrâzî, Tarikh al-Shihafa al-Arabiyya, Bayrut, matabi dar sadir,1967 (1914,1933)

(2) Muhammad Ayish, 'Arab World Media Content Studies: A Meta-Analysis of a Changing Research Agenda', in Kai Hafez (ed.), Arab Media: Power and Weakness, New York and London, The Continuum International Publishing Group Inc, 2008.

(3) Tom J.McFadden, Daily Journalism in the Arab States, Columbus, Ohio State University Press, 1953.

(4) 千葉慈忠『現代アラブ・メディアー越境するラジオから衛星テレビへ』ナカニシヤ出版、二〇一四年、七七頁。

(5) 同上、九四頁。

(6) 同上、一八〇頁。

(7) 同上、二〇〇頁。

(8) トルコの見方とこの「アラブの春」を合わせた先行研究が多数存在している。以下、その例としていくつか述べる。
Burcu Kaya Erdema, Adjustment of the secular Islamist role model (Turkey) to the 'Arab Spring': the relationship between the Arab uprisings and Turkey in the Turkish and world press, Islam and Christian–Muslim Relations, Volume 23, Issue 4, 2012

Kireçci M Akif , Relating Turkey to the Middle East and North Africa: Arab Spring and the Turkish Experience, Bilig63 (Autumn 2012): 111-134
Bogdan Szajkowski, Social Media Tools And The Arab Revolts, Alternative Politics, Vol. 3, No. 3, 420-432, November 2011